韓愈の詩作

――その古體の優勢から近體の優勢への變化について――

下定雅弘

一　小稿の課題

韓愈の詩の毎年の各詩體の制作狀況を、花房英樹博士編集『韓愈歌詩索引』の資料表によって、整理してみた（小稿末尾付載の別表參照）。

これによれば、韓愈の詩作は元和七年までは古體が優勢だが、元和八年以後は、元和十四年及び卒年の長慶四年を除いて、一貫して近體が優勢である（編年については見解の別れる詩も少なくないが、拙稿では花房博士の編年にそのまま從う）。

試みに、元和七年までの古體と近體の制作數を別表に基づいて計算すると、古體は百四十七首、近體は三十二首で、元和七年までの詩作は、そのほぼ八割が古體である。

これに對して元和八年以後の詩は、古體の總計が六十四首、近體の總計が百三十一首で、元和八年以後の詩作は、そのほぼ八割が近體である。

韓愈の詩作は、元和七年までを古體の時代、それ以後を近體の時代といってよい。

どうして、このような變化が生じたのか。その原因を考えてみたい。

二　古體の擔った心境

元和七年までの古體の優勢を支えた主要因は、別表によって明らかなように、五古と七古だから、まず、これらの古體が、韓愈のどのような精神の表現を擔っているのか、それを確かめよう。

周知のように、韓愈は、貞元八年に進士に及第はするけれども、博學宏詞には合格せず、貞元十七年まで地方の幕僚としての生活を餘儀なくされる。

この間の韓愈の詩のほとんど全ては、自己の才學への強い自負心と、任官できない憤懣を歌う。

貞元十八年春にはようやく四門博士に任官して中央の職を得、翌貞元十九年には行政職の監察御史に轉任するけれども、その冬には陽山縣令に左遷される。元和元年都に歸還以後、元和六年までは、徐々に昇進するが、洛陽勤務が多く、元和七年には國子博士に再任されて（元和三年に國子博士に任ぜられている）、行政職から離れる。

この閒の韓愈の詩の大多數は、やはり自己の才學への自負心を昂ぶらせつつ、重用されない不滿を歌う。

二の一　五古の擔った心境

これらの詩はどうして古體で歌われているのか。まずその五古で歌われる理由について考えてみよう。

1、韓愈の自己の才學への自負心とは、「古」への志向がその内容の核心である。これを表現するのには、①古い傳統を持ち、高い思想性を備えた多くの優れた詩を有し、②一句の字數の少なさとリズムの斷續性によって思索的な雰圍氣を出しやすい、五古がふさわしい。

試みに、「古」の語の見える、「古」への志向を表現した、あるいはそれを含む詩を、韓愈の全ての詩（外集・遺文に收める詩を除く）の中から摘出してみると、次のようになる。[1]

「出門」59[2]	五古	貞元二年	
「孟生詩」155	五古	貞元九年	
「謝自然詩」17	五古	貞元十年	
「雜詩」152	五古	貞元十一年	
「此日足可惜贈張籍」38	五古	貞元十五年	
「幽懷」39	五古	貞元十六年	
「送靈師」47	五古	貞元二十年	
「秋懷詩十一首」其五22	五古	元和元年	
「同上」其七24	五古	元和元年	
「醉贈張秘書」44	五古	元和元年	
「送文暢師北遊」52	五古	元和元年	
「答張徹」53	五古	元和元年	
「寄崔二十六立之」153	五古	元和七年	
「與張十八同效阮步兵一日復一夕」212	五古	長慶四年	
	以上	五古十四首	
「古意」82	七古	貞元十九年	
「憶昨行和張十一」95	七古	元和元年	
「石鼓歌」139	七古	元和六年	
	以上	七古三首	
「古風」56	雜言	貞元十年	
「嗟哉董生行」60	雜言	貞元十五年	
	以上	雜言二首	

「古」への志向を示す詩十九首のうち、十四首が五古であって、「古」への志向の表現が五古となじむことは明らかである。

なおまた、十四首の五古のうち十三首が、十九首の古體のうち十八首が、元和七年以前の作である點にも注目していただきたい。

韓愈は元和八年に、比部郎中兼史館修撰に任ぜられることにより、自己の官職にようやく一定の滿足を示すが、「古」への志向を強め、自負心を高めるのは、不遇の程度に比例するからこのような現象が生ずるのである。[3]

これらの詩が、五古で作られた理由を具體的に探っておこう。

例えば、貞元十一年の作「雜詩」152は、古道に志して今の世に入れられない悲憤を、崑崙に登り天に飛び下界を見下ろして、空想の世界にはばたくことで忘れようとするのだが、結局疎外感を確認して終わるという筋立てである。

崑崙に登って天に飛ぶという發想は、五百家注が指摘するように、「離騷」を下敷きにしている。これは古體が用いられた理由の一つかも知れない。

だがもっと重要なのは、「雜詩」は李善が「流例に拘らず、物に遇いて卽ち言う」というように、王粲・曹植ら多くの古人が、不遇への

詠懷を始めとするさまざまな感懷を、自由な發想で託してきた、長い傳統を持つ詩題（通常五古）だということである。[4] 不遇に發する詠懷を、天上から下界を見下すという奔放な空想の形で表現するには、「雜詩」の持つこの性質がふさわしかったのである。

いま一例、元和元年江陵から都に歸還して、權知國博士の時の作「秋懷詩十一首」18～28の其五を見よう。[5]

離離掛空悲　離離として空悲を懸け
慼慼抱虛警　慼慼として虛警を抱く
露泫秋樹高　露は秋の樹の高きを泫おし
蟲弔寒夜永　蟲は寒たき夜の永きを弔う
斂退就新懦　斂退して新たなる懦に就き
趨營悼前猛　趨營して前の猛かりしを悼む
歸愚識夷塗　愚に歸って夷き塗を識り
汲古得修綆　古を汲んで修き綆を得たり
名浮猶有恥　名の浮ぎたるは猶恥ずること有り
味薄眞自幸　味の薄きは眞に自ら幸いなり
庶幾遺悔尤　庶幾わくは悔尤を遺れ
卽此是幽屛　卽ち此に是れ幽屛せん

「秋懷詩十一首」は、現下の境遇への不滿から來る孤獨寂莫にさいなまれ、自己の生きかたについて考えこみ、さまざまに搖れ動きつつも、結局は古道を學ぶことに不變の決意を表明する、という內容の連作である。

この詩の七・八句に「愚に歸って夷き塗を識り古を汲んで修綆を得たり」というのは、世人と競爭せずに自分は獨り聖賢の書を研究していくのだという決意を述べている。

この詩題は、謝惠連に先蹤がある。やはり寢つかれぬ秋の夜のわびしさに感じて、世間と齟齬するがゆえの孤獨寂莫にさいなまれ、自己のこれまでの生きかたを反省する、五言三十二句の作である。ただし、謝惠連は友を大切にし若い日の歡樂を盡くそうと結論するのでその點は違う。

韓愈は、おそらく同じく自己の生きかたについて考えこんだ謝惠連を意識しつつこの詩を作った。

「古」の語が現れていない詩であっても、「古」への志向を核とした、自己の生きかたの根本に關わる主題を持った詩は少なくない。こうした思想性の強い重い主題には、五古がふさわしいのである。

2、不遇や左降に對する憤懣・鬱屈等の激しく複雜な葛藤を吐き出すには、短篇で平仄や對偶の規則を守らねばならない律絕よりも、句數の決まりがなく長篇が可能で、平仄や對偶についても自由な古體の方が適している。

短い五古を一首とりあげてそのことを確認しよう。

貞元二十年、陽山に赴く時に「同冠峽」45という十二句の五古がある。

南方二月半　南方二月の半ば
春物亦已少　春物亦已に少なし
維舟山水閒　舟を維ぐ山水の閒
晨坐聽百鳥　晨に坐して百鳥を聽く
宿雲尙含姿　宿雲尙姿を含み
朝日忽升曉　朝日忽ち曉に升る
羈旅感和鳴　羈旅和鳴に感じ
囚拘念輕矯　囚拘輕矯を念う

潺湲淚久迸　潺湲として涙久しく迸り
詰曲思增繞　詰曲として思い増す繞る
行矣且無然　行け且く然すること無かれ
蓋棺事乃了　棺を蓋いて事乃ち了らん

この詩は、一句から六句は、同冠峽に停泊して一夜明けた朝の景色の素晴らしさを描出する。しかし七・八句では、鳥の樂しげなさえずりや飛び回るさまは、左遷の悲しさをつのらせるばかりであることをいい、九・十句では、涙がはらはらと流れ、左降の憤懣に繰り返し襲われることをいう。だが結びの二句では氣をとりなおし、悲しんでいてはだめだ、「棺を蓋いて事乃ち了る」、人生はこれからだと、自負心を昂ぶらせて終わる。

これは自分の心境の變化を順次敍述する表現で、こうした表現には古體がふさわしい。

律絶の場合は、感情の變化をこのように順次表現するのではなく、古體とは異なる工夫をする。

同じ時に作った五律の「次同冠峽」232を見よう。

今日是何朝　今日是れ何の朝ぞ
天晴物色饒　天は晴れて物色饒し
落英千尺墮　落英千尺墮ち
遊絲百丈飄　遊絲百丈飄る
泄乳巖脈　泄乳巖脈に交わり
懸流揭浪標　懸流浪標を揭ぐ
無心思嶺北　嶺北を思うに心無し
猿鳥莫相撩　猿鳥相撩ること莫れ

峽の素晴らしい景色に接しての感懷を歌うのは同じである。ただし、この詩の場合は對偶の兩聯で峽の景物の素晴らしさを描出しておいて、尾聯で、せっかくこの素晴らしさにひかれて望郷の思いを忘れようとしているのだから、猿と鳥よ、鳴いて私の心を搔き亂さないでおくれという。すなわち、左降の悲哀自體は表に出さずに、悲哀の湧き起こるのを抑えようとする心情を述べることによって、左降の悲哀の深さを表現しようとしている。

前掲の古詩と比べた場合、この詩の表現の特徴は、美しい景に魅かれてその思いを大切にしようとしつつもその心境にとどまっておれない矛盾という感情に焦點をあて、その描出に工夫を凝らしているという點に在る。律詩は、ある一つの感情（換言すれば、ある角度から、またある一局面で切りとられた葛藤）に焦點を當てて、それを表現する詩體であり、古詩のように感情の異なる側面や違った局面の表現をすることは苦手なのである。

以上のことの當然の歸結として、不遇による激しい葛藤の表現は、長篇になることが多い。

例えば貞元二十一年の五古「岳陽樓別董司直」51は九十二句の長篇である。この詩は、初めに洞庭湖の景を敍し、次いで量移の地江陵を目指して船旅でここにやってきて、この景に接してようやく愁いをはらすことができたこと、幼なじみの董司直が宴を催してくれての歡樂、陽山に左遷されるに至った理由、陽山へ赴く時の苦勞話などをして、最後は、苦勞して人事の得失は分かったから、宰相になろうなぞという了見は棄てて氣樂に百姓でもするんだといって終わる。

幼なじみの知己を前にして、量移された安堵感と次の職への不滿とが重なった鬱憤を存分に吐き出しているのが、この詩である。

この他、「答張徹」53（百句、元和元年）・「寄崔二十六立之」153（百

六十二句、元和七年）等も、相手の不遇への共感を示すと同時に、自己の人生の波瀾・現職への不満等を、ほとばしるように語っている。

訴える相手はいなくても、五古はしばしば長篇となる。しかし、門弟や幼なじみ、同じ境遇の同僚等に語る時は抑制が無くなって、揺れ動く心のさまざまな側面を冗説に表現して、ただでさえ長篇化する傾向のあるものがこのように長くなるのである。

長篇といえば五言排律も長篇が可能で、例えば柳宗元は、永州において左降の苦悩を長篇の五排數首に託した。しかし、五古の方が壓倒的に多い。五排は、①韻律の調和と對偶の蓄積によって、獨特の莊重華麗な調子を生み、②また、同じことの別の側面として、韻律・對偶の規制が嚴しいから、やはり激しい葛藤の率直な表現能力は五古の方が高い。

五古が激しい葛藤を擔うのに適していることは、元和十四年潮州への貶謫の年に、再び古體が優勢となっていること、その大多數を五古が占めていることによっても明瞭である。

二の二　七古の擔った心境

激しい葛藤の表現という點では、七古もすぐれた能力を持っている。

ただし、七古を五古と比べると、①リズムの連續性の高さと一句の字數の多さのゆえに、その調子は動的で波瀾抑揚に富み、描寫は緻密鮮明となる。②同じ理由によって、また五古と比較した場合の歴史の新しさによって、思索的な重い内容を擔う能力は五古よりも劣り、起伏の激しい敍事や波立つ感情の表出に高い能力を發揮する。

短い七古「貞女峽」80を擧例してそのことを確認しよう。

江盤峽束春湍豪　江は盤り峽は束ねて春湍豪なり
雷風戰鬪魚龍逃　雷風戰鬪して魚龍逃る
懸流轟轟射水府　懸流轟轟として水府を射る
一瀉百里飜雲濤　一瀉百里　雲濤を飜す
漂船擺石萬瓦裂　船を漂わし石を擺いて萬瓦裂く
咫尺性命輕鴻毛　咫尺性命　鴻毛よりも輕し

前掲の詩と同じくやはり貞元十九年の冬、陽山に左遷される時の作である。

この詩は、春先に水量が增して轟轟とうなりをたてて流れる江の狀況を四句まで描出し、結びの二句でその江を下っていく奔弄される木の葉のような舟を歌っている。

この激動する流れと奔弄される感覺とは、五古の斷續的・靜的なリズムでは出すことができず、七古でなければ表現できない。

また「李花贈張十一署」88は、元和元年江陵に到着した後、李花が盛んに開いているのに感興を催して、同じ境涯にいる張署に送った詩。無數の蠟燭を逆さに立てたような夜の李花の美しさ、朝日に映える李花の輝きを歌ったこの詩は、狂おしい溢れる思いで滿たされている。その眞っ白な李花が江の岸邊に果てもなく咲くさまは「風は揉み雨は練って雪も比するを羞ず、波濤空に飜って杳として涘無し」と歌われるが、この華やぎと動的な感じは七古によってはじめて可能なのである。

七古のこの動的な性格は、必ずしも悲憤の表現にのみ向けられるのでなく、威勢よく門弟に敎え諭す時（「劉生詩」96・「贈崔立之評事」100）や、猛り狂う山火事の表現（「陸渾山火和皇甫湜用其韻108」）や、李花で滿開の洛陽の園を友人と花見する輕快で華麗な雰圍氣を出す時（「李花」其二132）等、にも生かされている。

しかし、なんといっても、不遇の身を悲嘆する「忽忽たる心情」とでもいうべきものが、韓愈の七古の大多數を占める內容である。

だから、七古の擔う葛藤は、根本的には五古の擔う葛藤と同じものである。五古と同質でありながら、それよりも一層波瀾抑揚に富む感情を擔うのが七古の役割なのである。

その七古が、元和八年以前に集中しており、それ以後は元和十四年に一首あるだけということは、逆にいえば、元和七・八年以前までの激しい葛藤が、それ以後は微弱になったということを示している。

だから、元和七年以前に大量の五古と七古とが歌われるのは、一口にいって、その不遇のもたらす激しい葛藤が原因なのである。

二の三　雜言の擔った心境

七古に比べればかなり少ないとはいえ、雜言もまた元和五年までに十二首が作られ、元和六年以後は元和十一年に二首が作られるのみで、元和七年までの古體の優勢の無視できない要因となっている。この時期に雜言がこのように歌われたのはなぜだろうか。

一例として、貞元十九年の作「利劍」64を擧げよう。七言を基調にして五言と十言とをとりまぜる全九句の雜言である。

利劍光耿耿　　利劍　光耿耿たり
佩之使我無邪心　　之れを佩べば我をして邪心無からしむ
故人念我寡徒侶　　故人我が徒侶寡きを念い
持用贈我比知音　　持用して我に贈って知音に比す
我心如冰劍如雪　　我が心は冰の如く劍は雪の如し
不能刺讒夫　　讒夫を刺す能わず
使我心腐劍鋒折　　我が心をして腐し劍鋒をして折れしむ
決雲中斷開青天　　雲を決いて中斷し青天を開く
噫劍與我俱變化歸黃泉　　噫　劍　我と俱に變化して黃泉に歸せん

この詩が七言を基調とするのは、前半の四句では劍の透明感と自分の心の清らかさを强調する痛快な感覺の表現に、後半の二句では突き上げる怒りの勢いの表現に、七言の流麗なリズム・動的なリズムが適しているからだろう。はじめの一句「利劍光耿耿」と中の一句「不能刺讒夫」が五言の重いリズムであるのは、いずれもそのことを凝視させる効果を持っている。最後の十言は、この劍で讒夫を斬ることができず、空を斬るしかないというそれまでの內容を受けて、それならば、劍とともに黃泉の國へでも行ってしまいたいというのだが、この長く途切れないリズムは、思いきることのできない綿綿たる怨みの感情をよく表現している。

雜言は、一首一首、句數も異なり、リズムも異なる。しかし、共通しているのは、この詩に見えるように、樣々なリズムを驅使して屈曲變化する感情の相を表現するということである。それは七古同樣變化に富むが、七古よりももっと複雜で一筋縄に行かない感情の表出を擔っている。

そして、雜言の感情の根底に在るのはやはり、自己の不遇に對する激しい憤懣である。大量の五古・七古を歌わせたのと同じ不遇のもたらす激しい葛藤を基盤にしつつ、五古よりも七古よりもさらに屈曲變化する激しく複雜な感情を雜言が擔ったのである。

この雜言が、元和六年以後はほとんど歌われなくなるということは、逆にいえば、激しい葛藤を基盤とするこうした複雜な感情が、この頃以後、韓愈の心から次第に遠退いていったということを意味するだろう。

二の四　「奇險」「以文爲詩」と評される詩の制作時期

ところで、次に示すような、韓愈の詩のうちいかにも韓愈らしいとされる、「奇險」あるいは「以文爲詩」の例として擧げられてきた作のほとんどは、[6]元和七年以前に作られている。[7]（※印を付したものは、「古」への志向を示す例として前掲した作）。

※「謝自然詩」17	五古	貞元十年
※「此日足可惜贈張籍」38	五古	貞元十五年
※「嗟哉董生行」60	雜言	貞元十五年
「山石」68	七古	貞元十七年
「落齒」112	五古	貞元十九年
「苦寒」114	五古	貞元十九年
「題炭谷湫祠堂」142	五古	貞元十九年
「謁衡嶽廟遂宿嶽寺題門樓」84	七古	永貞元年
「南山詩」16	五古	元和元年
「薦士」54	五古	元和元年
「鄭群贈簟」97	七古	元和元年
「元和聖德詩」5	四古	元和二年
「孟東野失子」107	五古	元和三年
「陸渾山火和皇甫湜用其韻」108	七古	元和三年
「和虞部盧汀酬翰林錢七徽赤藤杖歌」115	七古	元和四年
「月蝕詩效玉川子作」154	雜言	元和五年
「寄盧仝」134	七古	元和六年
※「石鼓歌」139	七古	元和六年
「調張籍」148	五古	元和十一年
「琴操十首」6～15	四古	元和十四年
「答柳柳州食蝦蟇」181	五古	元和十四年
「華山女」166	七古	元和十四年

これらの詩は、ほとばしる感情・權貴や世間に對する挑戰的な調子・怪奇なあるいは壯大な空想等に滿ちている。そのほとんどが、元和七年以前に作られているのは、不遇による激しい憤懣が、そうした感情や空想を形成する原動力となっていたからであろう。[8]そしてまた同じ憤懣が、詩人として名を擧げることへの意欲をかきたて、古體によるかつてない力作の制作へ向かわせたからであろう。

三　近體の優勢について

元和八年以後の近體の優勢の原因を考えよう。

近體の制作數は七絕が最も多く、五律・五絕がこれに繼ぐ。七絕の擔った心境を檢討することから始めよう。

三の一　七絕の擔った心境

元和八年以後に限らず、韓愈の七絕の作り方を見ると、おおむね旅の途次に多量に作られている。

別表で、七絕の制作の多い年を見ると、

(1)貞元二十一年前後—陽山への左降・郴州での待命・江陵への旅・江陵から都への歸還と、境遇が短期間に頻繁に變化している。

(2)元和十・十一年—城南へ遊んでの作が多い。

(3)元和十二年—蔡州遠征の途次の作が多い。

(4)元和十四・十五年—潮州左降と袁州からの歸途に作られたものが大部分である。

(5)長慶二年—深州に王庭湊を宣撫しに行く途次の作が多い。

白居易も、元和十年江州に向かう途次二か月の間に四十首もの律絕

を作ったが、七絶はその二十一首を占める（古體は十四首）。

だとすれば、旅に出ることが多く普段にない刺激を受ける機會が增えたから、七絶が增えたといえるだろうか。

そうとはいえない。なぜなら、韓愈は貞元二十年以前も旅は何度もしているのに、七絶は殘っていない。集に洩れたということは考えられるが、そうだとしても、作られた數はごく僅かなものだったろう。

それはなぜなのか。

任官できないこの頃の感情は、憤懣かさもなくば沈鬱が主たる感情である。それはいたずらに自負心の肥大するもやもやした感情であり、英語の本來の意味でのコンプレックスな感情である。

七絶はこのような感情を擔うことが苦手である。七絶は、①七言でしかも近體であることによる音調のなめらかさと、②總字數の少なさ（しかし五絶に比べれば感情を鮮明に表現するのに十分な字數を持っている）によって、純一で明快な感情を表現する優れた能力を持っている。逆に、深刻で複雜な葛藤を表現する能力は低い。

任官以前に七絶が殘されていないのは、その時期の韓愈の精神が、七絶にふさわしいそうした感情を、容易に形成しなかったということだろう。

元和八年以後、旅に出る等の外からの刺激を受けやすい狀況になると七絶が增えているということは、その內面が刺激に鋭敏に反應するようになったということに他ならない。

この刺激に鋭敏に反應し、純一で明快な感情を形成する精神は、任官し高位を得ることによってもたらされた。

朝臣としての identity を獲得して[3]、方向の明確な安定した精神を持つことによって、喜びにせよ悲哀にせよ、純一で明快な感情が形成されるようになったのである。

白居易が江州左降の途次、大量の七絶を詠んだのも、京官としての強固な identity が危機にさらされたから、何を見ても鋭敏に悲哀の感情をほとばしらせたのである。

以下、元和八年以後の韓愈の七絶が、どのような心境を擔ったのか確かめよう。七絶は元和十年以後に顯著に增加するから、元和十年以後の七絶について述べる。

元和十年の七絶について。韓愈は前年の暮れに知制誥となっている。この年には、八首の七絶が作られているが、そのうちの五首は、「盆池」270～274という、邸內に小さな池を作った時の感懷を歌ったものである。其の一を擧例しよう。

老翁眞箇似童兒　老翁　眞箇に童兒に似たり
汲水埋盆作小池　水を汲み盆を埋めて小池を作る
一夜青蛙鳴到曉　一夜　青蛙鳴いて曉に到る
恰如方口釣魚時　恰も方口に魚を釣る時の如し

この詩は、子供のようにうきうきして小さな池を作り、夜、蛙が鳴くのを聞いて、方口の地で魚を釣っているような氣分だと、至極滿悅な感情を表現している。其の二は蓮に當たる雨の音の快さを歌い、其の三は池の中の無數の虫が突如姿を消して魚影が隊をなすさまを歌い、其の四は、蛙に向かって、鳴くのはよいが喧嘩はするなといい、其の五は、夜、池の水面に星がどれくらい映るか見ようと歌う。

以上のようにこの五首は、自ら作った邸內の小さな池でおきた現象に對するささやかな感動を歌ったもので、それを支える精神は、知制誥となった喜びである。

また、やはりこの年に作られた「題百葉桃花」267・「芍藥」275は、

いずれも宮中に宿直したおりに見た花の美しさに感じて作ったもので、二首ともに高位の朝臣として宮中に宿直するようになった境遇への満足を土台として詠まれたものである。

元和十一年の正月には、韓愈は「文士の極任」（『通典』巻二十一）といわれる中書舎人になっている。

この年の七絶は、「遊城南十六首」297～312のうちの十二首である。城南は韓愈の別墅の在った所で、ここを散策した時に、花や樹等を見て感じたことを七絶に表出している。例えば、「賽神」297は田野でのどかな氣分を歌い、「落花」300は落花が隣の家に吹かれていって歸ってこないのは殘念だといい、「楸樹」311は楸樹の趣は畫中のものだという。

「落花」を擧げておこう。

已分將身著地飛　已に身を將て地に著いて飛ぶを分とす
那羞踐蹋損光輝　那ぞ羞じん踐蹋せられ光輝を損するを
無端又被春風誤　端無くも又春風に誤られ
吹落西家不得歸　西家に吹き落とされて歸るを得ず

このように、これらの詩はいずれも小さなことがらへのささやかな感動を歌っている。

これらの詩の連作が知制誥・中書舎人となった現況に滿足した精神の所産であることは明らかである。

元和十一年には五古も多量に作られている。この年の五古の内容と七絶の大量の制作との關係について考えておこう。

五古といっても、この頃の五古に從前のような激しさや深刻さはない。句數を見ても、十二首中、八句のものが五首も有って、短古が主で長篇は僅かであり、この面にも葛藤の弱まりは現れている。

そのなかで最も長篇の五古は、「符讀書城南」162である。これは、學問と出世とを直結させて、息子にしっかり勉強せよと諭したもの。それが長篇の五古であるのは、生まれた時は差はないが、年をとるにつれて學問するとしないでは次第に大きな違いが生じ、終には雲泥の差になるのだと、幼い子によく分かるように事を分けて語る調子を求めたからで、そのためには、散文的で落ち着いた調子の長篇の五古がふさわしかったのである。

「人日城南登高」164は城南の別墅に小集を催した時の作。その結句に「人生は本坦蕩、誰か妄りに倥偬たらしむる。直ちに桃李の闌なるを指し、幽尋寧ぞ止だ重びするのみならんや。」というように、この詩にはかつてない安らぎが見える。

「感春三首」190～192はいずれも短古で、ゆく春を惜しみ、老いていく自己を悲しんでいる。このような感傷的な感情は、葛藤の渦中に在る時は生まれない。中書舎人となって大きな目的が果たされ、自己の人生の一つの段階が過ぎ去ったという實感が背景に在ってこのような感傷は生ずるのである。

これらは五古であることによって、しみじみとした飾り氣のない感傷を表出することになっている。また、それは朝臣となったことによる餘裕や感傷という感情を、七絶に比べれば總合的多角的にとりあげている。これに對して、七絶が歌っているのは、些細なことがらに對するささやかな感動である。

高位の朝臣への昇進を果たしたことは大きな感動である。韓愈は、その喜びを表出せずにはおれない。それが、この年にこのように多數の詩が制作された理由である。ようやく高官となれた喜びに基づく餘裕と感傷が主として五古に表出され、同じ餘裕と感傷を基盤とする些

細なことがらへのささやかな感動が、主として七絶に表出されて、このように七絶の制作量が増加したのである。

元和十二年の七絶は、行軍司馬として蔡州に遠征する途次の作及び勝利しての歸途の作で占められている。それらは、全く唐朝の忠臣としての identity に支えられて作られたものであり、その感情は意氣軒昂という言葉が最もふさわしい。

この年は、古體は一首も編年されていない。この年の韓愈の心境は、七絶を始めとする近體によって十分に表出しうる純一で明快なものだったといえるだろう。

元和十四年の七絶七首のうち六首は、潮州に向かう途次の作である。その一首「武關西逢配流吐蕃」355を見よう。

嗟爾戎人莫慘然　嗟爾戎人慘然たる莫れ
湖南地近保生全　湖南　地は近く生を保って全からん
我今罪重無歸望　我今罪重くして歸る望み無し
直去長安路八千　直ちに長安を去る路八千

この詩は、罪を得て流される吐蕃人に逢い、お前の流されるのは湖南だからまだ近い、私に比べたらましだという。これは、長安が自分の場であることについて何の懐疑も持たない精神が生む感情である。そして、その精神は高位の朝臣として活躍した歳月が育てたものである。[10]

長慶二年の六首の七絶のうち、三首は深州に王庭湊を宣撫しに行く時の作であり、一首はその任務を果たして歸還する時の作である。この時の作は、重要な任務を帶びての緊張と、成功の滿足感を歌っている。

以上、元和八年以後の七絶が擔っている心境を見てきた。高位の朝臣の地位を得たことによって韓愈の identification は完了し、自己が確立された。そこから、さまざまな局面において、喜びであれ悲哀であれ從前とは比較にならない純一で明快な感情が形成されるようになった。この感情が七絶の大量の制作をもたらしたのである。

三の二　五律の擔った心境

五律もまた、搖れ動く複雑な感情を表現するのではなく、古體に比べれば純一で明快な感情を表現する詩體である。

したがって、古體の制作量が低下し、この詩體が、元和八年以後、從前に比べればコンスタントに作られるようになるということは、七絶とはその擔う感情の性質に差異があるけれども（後述）、やはり、從前よりも精神の構造が安定し、感情の激しい複雑な搖れ動きが少なくなってきた、ということの反映だと考える。

例として、元和八年、考行郎中知制誥の時の作「寒食直歸遇雨」265を擧げよう。

寒食時看度　寒食　時に看るゝ度る
春遊事已違　春遊　事已に違う
風光連日直　風光　連日直し
陰雨半朝歸　陰雨　半朝に歸る
不見紅毬上　紅毬の上るを見ず
那論綵索飛　那んぞ綵索の飛ぶを論ぜん
惟將新賜火　惟　新賜の火を將て
向曙著朝衣　曙に向かって朝衣を著く

この詩は、頸聯までは、人々が皆樂しく遊ぶ中での多忙のつまらなさをいい、尾聯で、しかし新賜の楡の火の光で朝衣を着るのだという、高位の朝臣としての誇りを際立たせている。

あるいはまた、元和十一年の作「題韋氏莊」306（「遊城南十六首」の一首）も、かつての名門韋氏の衰えはてた別莊の跡を訪ねて、歎いて立っていても仕方がない、有爲轉變は人の世の常だというのだが、韋氏への同情は乏しく、これも高位に在る餘裕を基盤として作られている。

さらに例を上げることはしないが、要するに、元和八年以後の五律は主として、高位を得た餘裕を土台としたゆったりと落ち着いた氣分を歌うのによく用いられている。

五律が增加する原因もまた、高位を得たことによる滿足、それがもたらす餘裕にある。七絕が高位を得たことに由來するささやかなことがらへの活發な反應を歌っていたとすれば、五律は五古に似て、高位を得たことに由來するゆったりとした感情を擔っている。五古にも表出されていたゆったりと落ち着いた感情の、一局面・一側面が、五律に表出されて、その制作量が增加したのである。

三の三　五絕の擔った心境

元和八年を境として近體が古體を凌駕する直接の原因は、この年に作られた二十一首の五絕に在る。

それは、「奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠」276～296である。韓愈はこの年の三月、比部郎中兼史館修撰になっている。

序によれば、虢州刺史となった劉氏がその刺史の邸宅を詠んだ詩への和韻が當時長安で流行しており、劉氏が友人だということで自分も作ったのだという。それは新亭・流水・竹洞・月台・渚亭等と題して、虢州刺史たる劉氏の邸宅の風趣をさまざまな角度から歌うものである。最初の二首を擧げておこう。

新亭

湖上新亭好　湖上　新亭好し
公來日出初　公來る　日出ずるの初め
水文浮枕簟　水文枕簟に浮かび
瓦影蔭龜魚　瓦影　龜魚を蔭す

流水

汩汩幾時休　汩汩として幾時か休まん
從春復到秋　春從り復た秋に到る
只言池未滿　只言う池未だ滿たずと
池滿强交流　池滿つれば强いて交も流れん

これは、要するに劉刺史の善政を慶賀する意味をこめて、官宅の花鳥風月を歌った社交の詩である。

韓愈は、五絕は他には五首、元和十一年に四首、十二年に一首作っているだけである。元和十一年の作の三首は、先に述べた「遊城南十六首」中の作である。

五絕の字數は各詩體中最も少ない。それは七絕よりもさらに、限られた感情の一局面一側面を表現する能力しかないように見えて實はそうでなく、字數の少なさとリズムの斷續性とがあいまって、寡默が持つ獨特の深さと廣がりとを極小の世界に實現することが可能である。

しかし、韓愈の作った五絕はそのような五絕ではない。それは、七絕よりもさらに手輕な應酬唱和の詩であり、閑遊のひとこまの摘出である。これらを支えた精神が何であるかはすでに述べてきた通りである。

元和八年には、五古が四首、七古が二首作られている。それらの詩を見ると、門人の劉士服を勵ます二首（「送進士劉士服東歸」145・「送劉士服」161）には、自らは苦難を乘り超えて來たという自負が見える。

七古の一首「雪後寄崔二十六丞公」186（十月の作）は、門人の崔斯立が微官のままに留まっているのをなんともできないこと、孟郊が世にいれられないまま死んでしまったことを、かなり激した感情で歌っている。これとても要するに不遇の門弟に對する同情であり、自らの境遇は問題にされていない。

古體が韓愈自身の葛藤を歌わず、すなわち葛藤が弱まり、社交と閑遊の五絶が大量に歌われたこの年は、確かに韓愈の精神に大きな變化があった年だといえる。この精神の變化が、詩體の比率の逆轉となって現れたのである。

三の四　七律の擔った心境

七律の總制作數は十四首に過ぎないが、そのうち十三首は元和九年以後に作られており、詩體の變化を決定する無視できない要因となっている。七律の擔った心境についても檢討し、なぜ七律のほとんどが元和九年以後に作られたのかを確かめておこう。

元和九年以後の韓愈の七律を見ると、この時期に多數の七律が作られたのには、大きく二つの要因がある。

一つは、韓愈の七律のうち、七首すなわち半分は應酬唱和の作なのだが、これらは全て相手の詩體に應じて七律で歌ったものだから、こうした人々との應酬唱和をするようになったということ自體が、七律の歌われるようになった大きな要因だということになる。

その相手を見ると、張署（韓愈と共に陽山に流された人、韓愈が潮州に左遷される時には韶州の刺史）が二首、胡証（諫議大夫から選ばれて振武軍節度使となる）が一首、盧汀（庫部員外郎）が一首、裴度が一首、張籍が二首である。

このうち元和七年より前から交遊があったのは、張署・張籍で、他の人とのつきあいは、元和七年以後のものである。宰相の裴度を除けば大體同僚の朝臣と見てよい。

そして彼らに應酬唱和した作の內容は、胡証に對しては、振武軍に赴任するについての留別の詩を示してくれたのでこれに報いたもの、盧汀に對しては、元日の朝會の典雅・華麗を歌ったもの、裴度に對しては、蔡州を平定して歸還したのを賛美しその榮進を慶賀するもの、という調子である。つまりいずれも相互の朝臣としての identity を前提として贈答唱和しあわれた社交性の强いものである。

だから、元和七年以後、韓愈の七律制作が增加する一つの要因は、その昇進による交友關係の廣がりにある。

七律が增加する今一つの要因は何か。

別表によって分かるように、潮州に左降された元和十四年と袁州に量移されて都に歸還する元和十五年に七首の七律が集中しているから、潮州左降に伴う何らかの感情が、七律の制作を刺激したに違いない。

「左遷至藍關示姪孫湘」354を見て、その心境と詩體の關係を探ろう。

一封朝奏九重天　夕貶潮州路八千
欲爲聖明除弊事　肯將衰朽惜殘年
雲橫秦嶺家何在　雪擁藍關馬不前
知汝遠來應有意　好收吾骨瘴江邊

一封　朝に奏す九重の天
夕べに潮州に貶せらる路八千
聖明の爲に弊事を除かんと欲す
肯て衰朽を將て殘年を惜しまんや
雲は秦嶺に橫たわって家何にか在る
雪は藍關を擁して馬前まず
知る汝が遠く來る應に意有るなるべし
好し吾が骨を瘴江の邊に收めよ

この詩は、激しく昂ぶる悲壯な感情を歌っている。この悲壯な感情は、自己のなしたことに對する強い確信に裏づけられていて、不遇時代のような憤懣に醸成された自負心とは違う。

こうした心境には、七律がふさわしい。激しい感情であって、しかも亂れているのではない方向のはっきりとした感情を擔うのには、またこうした單純明晰な主張を擔うのには、五律や絶句と比べた場合の總字數の多さ・對偶・リズムの連續性と規則性等があいまって、澄明な映像と昂揚する調子を提供してくれる七律がふさわしい。

この激しく昂まる悲壯な感情は、やはり潮州への途次に歌われた「次鄧州界」356をも支える心情である。

元和十五年、量移されて袁州に向かう途次、韶州を過ぎる時に張署に贈った「韶州留別張端公使君」363は、量移されて死地を脱し都に歸還できるのは確實になったという狀況での惜別の詩で、感傷性の強い作である。この詩では、惜別の情と北歸への期待とがないまぜになった纏綿たる情緒が、七律のなめらかなリズムによって表現されている。

同じく都に歸ることが決定して歸還の途次襄陽に立ち寄って、李逢吉に贈った詩「酒中留上襄陽李相公」370には、許された感激があり、中書舍人だったことを誇る感情が見える。これはやはり一種の感傷である。この快い感傷を基盤としてこの詩は、酒宴の華やぎを歌う。この感傷性と華やぎが、七律の流麗な音調と明晰緻密な映像によって表現されている。

以上、元和十四年・十五年の七律を見るに左降の途次には激しく憤る悲壯な感情が、量移の後には、死地を脱したことによる感傷性が、七律を支える感情であることを確認した。

この兩者は全く異なる感情のように見えるが、しかし自己の正義に對する確信と、復歸への強い願望という點では同じ精神構造に支えられている。この純粹で確固たる精神が、局面の相違に應じて、前者では悲壯という感情を現し、後者では感傷という感情を現したのである。

元和十四年は、貞元末年から元和初年とともに、韓愈の心境が激しく搖れ動いた年である。この年に、多數の五古とともに、七古も久しぶりに作られたのは、葛藤の激しさを反映している。だがそれだけではなく、四言古詩十首も作られ、近體も、七絶・七律の兩者が作られている。

だから、この年の韓愈の心は極めて活發に動いたのであって、その心の動きの諸側面が、多くの詩體の異なる作に表出されたのである。ただし、注意すべきは、どの詩體をも貫いているのは、七律で確認した唐朝の朝臣としての強固な identity・自己の正義に對する信念だということである。

例えば長篇の五古「瀧吏」171は、問答體を用いて、自らの心中に有る不安を叱咤し、葛藤を率直に表現している。しかし、それはかつてのように重用されない不滿をもらす一方で、歸隱するのだというような搖れを示さない。潮州に赴任する心がまえを固めるための葛藤であり、唐朝の官吏として生きることにはいささかの疑念もない。また、「食曲河驛」169の結句に「身を殺すも諒に補う無くんば、何を用てか生成に答えん」というのは、朝臣としての使命感の表明だが、ここには自己の信念に基づいて自己を生かそうとする強い思いがあるだろう。

この朝臣としての identity を基盤とする、自己の正義に對する信

念の激しい昂揚が、道教の迷信なることを痛罵する七古「華山女」166を作らせたのであり、「琴操十首」6～15がもし元和十四年の作であるならば、同じくこの信念の強さが、孔子や周公や文王の不遇に自己の災難を託す、壯重で古雅な詩體である四言古詩の連作を作らせたのである。

この identity と信念は、中書舍人のみならず、吳元濟討伐に功あって刑部侍郎まで務めた誇りと自負心とがその基盤となって強固に培われたものである。

元和八年以後の七律の制作もまた、それを促進したのは、高位の朝臣としての identity の強さに他ならない。

以上で、近體の增加の原因が明らかとなった。それは一口にいって、純一で明快な感情の表出に優れるという近體の特性が、朝臣としての強い identity に適合したからである。

三の五　古體の優勢から近體の優勢への變化の原因

元和七年の末か元和八年のはじめ、韓愈は「進學解」（卷十二）を書いている。この文は、自己の學問に對する強烈な自負心を語り、その自分が閑職にとどめおかれているのは、實は宰相の眼力がないのだということを主張したものである。韓愈のこの狙いは的中する。彼の文才は認められて、比部郎中兼史館修撰に任ぜられる。[11] これが、韓愈に大きな喜びをもたらしたのは當然であろう。

韓愈がこの職にある元和九年正月、柳宗元は韓愈の「答劉秀才論史書」（外集卷二）の內容を知って、「與韓愈論史官書」（「柳宗元集」卷三十一）を書き、韓愈が史實を記述することに躊躇しているのを咎めた。韓愈の躊躇は、ようやくにして得た自己にふさわしい職を守ろうとする保守の姿勢から出たものであろう。

元和八年三月に、比部郎中兼史館修撰となったことは、韓愈の官歷にとって、從來とは一線を劃した重要な事件だったのである。[12]

なお、ここで、貞元十八年以前には、近體が見えないことについて一言しておく。

四門博士に任官する前にはただの一首も近體を作らなかったとは考えにくい。なんらかの事情で、集に漏れたものがあるだろうが、それにしても近體がほとんど制作されなかったのは事實だろう。

古體一邊倒のこういう時代をどう考えるかは、すでに七絕の項で述べたとおりである。

不遇に對する激しい憤懣を持ち、古代主義を徹底させていくこの時期の韓愈の精神には、近體の單純さやなめらかさ、そこから來る輕便さや抒情性といったものは無緣だったということだろう。

これに對して、貞元十九年以後、僅かとはいえ近體が歌われ始めるのは、例えば、貞元十九年監察御史の職に在った時の五排「詠雪贈張籍」259が、都に降った雪の美しさに感激して、そのシンシンと降り積み華麗に舞うさまを描出しようとして作ったように、あるいは貞元二十一年待命中の郴州から量移の地江陵へと向かう時に張署に贈った七絕の三首（「湘中酬張十一功曹」235・「郴口又贈二首」236 237）が、北へ歸れる喜びを歌ったことに見えるように、任官できたことによる一定の餘裕や復官できる喜び、すなわち任官できたことを基盤とする哀樂の反映に他ならない。

以上を要するに、韓愈の詩作は詩體という面から見る時、古體一邊倒の時代・古體の優勢の時代・近體の優勢の時代の三期に分けることができる。

そして、それぞれの時期は、求官時代・下級官僚時代・高級官僚時代

に對應し、それぞれの時期の官僚としての identity の獲得の深さによる、葛藤の性質の變化に應じて、古體・近體の制作量は變化しているのである。[13]

四　元和期の詩人たちの詩作
――その古體の優勢から近體の優勢への變化について――

韓愈の詩作に見える變化と類似の現象は、柳宗元にも見える。まる九年の永州での流謫生活を終えて、元和十年正月長安に歸る時から、柳宗元の詩作も近體が優勢となった。[14]

白居易もまた、下邽での服喪を終えて長安に復歸してきた元和九年暮れ以後、古體の優勢から近體の優勢へと轉換した。そして江州時代の古體近體双方の激增の時期を經て、都への復歸が確實と思われた忠州時代以後、壓倒的・持續的に近體が優勢となる。[15]

それぞれの詩體の變化にはそれぞれの理由がある。しかし、朝臣としての identity を獲得しようとする激しい熱情の時代が過ぎ去るとともに、近體の時代が訪れているのは、みな同じである。

そしてその轉機は、どの詩人の場合も、元和十年前後に訪れている。それは、おそらく遇合ではないだろう。

元和の中興の最盛期、この危機と情熱の時代は、韓愈にとっても、柳宗元にとっても、白居易にとっても、古體詩の時代だったのであり、その時期の去るとともに、彼らはみな近體の時代へと移行していったのである。

その變化は、古文運動が隆盛から沈滯へ移行していくのと軌を一にしている。

今後、この問題をさらに同じく元和期の詩人である元稹や劉禹錫にもおしひろめ、元和期における古體詩の時代から近體詩の時代への轉換の全貌を明らかにしたい。その作業は、古文運動を支えた精神が何だったのかということをも從來より一層鮮明にし、時代の轉換と文學の變化との關係という大きな問題を深める重要な意義を持つだろう。

注(1)　花房博士前掲書を參照した。

(2)　以下、詩題の後に付す算用數字は、花房博士前掲書に定める作品番號である。

(3)　韓愈の「古」への志向は、昇進を果たすことにより次第に弱まっていく。文では、「古」への志向の發言は、貞元十七・十八年頃に最も頻繁だが、自己の「古」への執着を表明するのは、元和六年の「送窮文」（卷三十六）が最後である。最晩年、長慶四年の「唐故江南西道觀察使中大夫洪州刺史中兼御史丞上柱國賜紫金魚袋贈左散騎常侍太原王公神道碑銘」（卷三十一）では、「其の本に志有るも、而も古陳に泥む。用に當って迂る、乖戾して伸びず。」と、古代に拘泥することを戒めるにいたっている。

川合康三「韓愈の「古」への志向―貞元年間を中心に―」（集刊東洋學五一、一九八四年）は、貞元年間の韓愈を對象として、その現實からの疎外感が、「古」への identity を强めたことを論じている。

(4)　一海知義「雜詩について」（日本中國學會報十、一九五八年、一五〇頁）を參照。

(5)　以下、韓愈の詩の引用は、通行の東雅堂本（同治己巳〔一八六九年〕江蘇書局刊本）による。

(6)　江辛眉「論韓愈詩的幾箇問題」（中華文史論叢一九八〇年一月）・陳邇冬選注『韓愈詩選』（人民文學出版社、一九八四年）舒蕪序・許可「論韓愈的詩」（中國古典文學論叢一、一九八四年十二月）等に、共通して擧例されている作を記した。

一、この表は、花房英樹博士編集『韓愈歌詩索引』（京都府立大學人文學會一九六四年）の資料表に基づき、韓愈の各年の各詩體の制作狀況が、一目で分かることを目的として制作した。從って聯句十一首は對象としていない。また、本集の作品を對象とし、外集・遺文の作品十八首（全て古體、元和七年以前の作が十四首、元和八年以後の作が二首、不明二首）は含んでいない。

二、作品番號35・36・165・197・256・257の詩は、いずれも、某年以後の作となっているが、本表では、その數が少ないので、全て假に某年に配した、

元和6	元和7	元和8	元和9	元和10	元和11	元和12	元和13	元和14	元和15	長慶1	長慶2	長慶3	長慶4	?	計
44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57		
								10							12
5	1	4	2	1	12		1	15	1	4	1	3	5	1	133
8	1	2						1							53
					2										14
13	2	6	2	1	14		1	26	1	4	1	3	5	1	212
	1			1	2							2			13
		2		2	4	3	5		3	3	5			1	35
			2	2		1		3	4		1				14
															1
		21			4	1									26
2		3	2	8	12	13		7	6		7	2			75
2	1	26	4	13	22	18	5	10	13	3	13	4		1	164
15	3	32	6	14	36	18	6	36	14	7	14	7	5	2	376

(7) 李光富「略論韓愈詩的平淡風格」（四川大學學報・哲學社會科學一九八四―三、總第四二期）は、「韓集中の奇險な詩篇はおおむね元和五・六年の前に作られ、此の後は奇險でない詩が大部分を占めるようになる」と指摘する。王志華「關于韓愈〝以文爲詩〟」（汾水一九七八年六月）も、「〝以文爲詩〟と〝奇詭〟を追求する傾向は、主に彼の前期の敍景と應酬唱和の性質を持った長篇の古風の作品に表現されている。」と指摘する。ただし、兩論文ともその原因の追究はしていない。

(8) 芦立一郎「韓愈の詩作」（福井大學教育學部紀要Ⅰ人文科學・中國學二八、一九七八年）は、彼の人生の前半を對象として、その屈辱と憤懣に由來する「狂」が、詩作において「奇」なる表現を追求させたとする。

(9) identity・identityは、無論E・H・エリクソンの用語である。拙稿では、主として、エリクソン『自我同一性　アイデンティティとライフ・サイクル』（小此木啓吾譯編、誠信書房、一九七三年初版）の「自我同一性の問題」の序論に「最後にそれは特定の集團の理想と同一性との內的な一致」といわれる意味、すなわち自らが唐朝の官僚の一員であるという意識的無意識的な認識・その自己認識の獲得というほどの意味で用いている。

(10) 同じ年の潮州での五古「答柳柳州食蝦蟇」181で、蝦蟇が食べられるようになってきた自分について、「常に懼らくは蠻夷に染み、平生の好樂を失わんことを」というのも、中華の朝臣としての誇りがいわせている。

(11) 前野直彬『韓愈の生涯』（秋山書店、一九七六年）による。

(12) 西上勝「韓愈「進學解」の敍法について」（文化四九―三・四、一九八六年）、「韓愈の墓誌銘について」（日本中國學會報三九、一九八七年）は、文の制作の變化という視角から、元和八年の史館入りが、彼の意識の變化の節目であることを指摘する。

(13) 葛曉「從詩人之詩到學者之詩―論韓詩之變的社會原因和歷史地位」

詩體＼年齡＼制作年	貞元2	貞元3	貞元4	貞元5	貞元6	貞元7	貞元8	貞元9	貞元10	貞元11	貞元12	貞元13	貞元14	貞元15	貞元16	貞元17	貞元18	貞元19	貞元20	貞元21	永貞1	元和1	元和2	元和3	元和4	元和5
	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39		40	41	42	43
四古																							2			
五古	1	1				1	3	5	2	1			2	5	2	1	1	4	4	13	18		1	3	2	7
七古													1	5	1	2		1	1	7	14		1	2	1	5
雜言	1								1	1			1	2	2			1		1			1			1
古體計	2	1				1	3	5	3	2			4	12	5	3	1	6	5	21	32		5	5	3	13
五排																		1		2	3					1
五律																			1	4				2		
七律																			1							
小律																			1							
五絶																										
七絶																			1	8	4					
近體計																		1	4	14	7			2		1
總計	2	1				1	3	5	3	2			4	12	5	3	1	7	9	35	39		5	7	3	14

（學術月刊一九八二―四、總第一五五期）は、韓愈の詩が前期には「古奥險怪」の長篇の多かったものが、後期には「閑情逸致」を表現する「小詩」と「近體」が多くなったことを指摘し、前者が「窮年」に、後者が「仕途比較得意」な境遇に由來することを述べており、拙稿の主旨と近似する。

(14) 拙稿「柳宗元詩における詩體の問題―元和一〇年を境とする古體から近體への變化について―」（日本中國學會報三六、一九八四年）に詳述した。

(15) 拙稿「白居易の閑適詩―その理論と變容―」（鹿兒島大學法文學部紀要人文學科論集二五、一九八七年三月）・「白居易詩の轉形期―江州時代から杭州時代へ―」（同上二六、一九八七年十月）に詳述した。

付記　小稿は、名古屋大學で開かれた一九八七年度日本中國學會における口頭發表の原稿を、補訂して成ったものである。鈴木修次先生・清水茂先生をはじめ、貴重な御指教を賜った諸先生に深く感謝する。